

西岡 いずみ（言語学）

現代チュルク諸語の指示詞の研究

本論文は、チュルク諸語に属する5つの言語の指示詞についてなされた対照研究である。チュルク諸語指示詞の従来の研究は、個々の言語のみを対象としており、しかも確固たる枠組みのないものが殆どであった。本論文は、実証的な記述の枠組みを持ち、チュルク諸語に属する複数の言語を対象とした対照言語学的研究としては、世界で初めての研究と言ってよい。

本論文は、第1章「理論的背景」、第2章「チュルク諸語の指示詞」、第3章「他の言語の指示詞との対照」等から成る。

第1章では、分析の枠組みを提示している。統一的な記述の基準として、発話現場において指示対象が知覚可能か否か、談話（複数の発話のまとまり）内で当該の指示詞より前に、同一の指示対象を表わす言語表現が必要か否か、の2つを設定する。これによって、指示詞の用法として、現場指示用法、非現場指示用法を区分し、さらに後者を、言語表現によってすでに談話に導入された要素を指示する用法と、そうでない用法とに区分する。

第2章では、上記の枠組みに則って、カザフ語、ウズベク語、現代ウイグル語、アゼルバイジャン語、トルコ語という5つのチュルク諸語の指示詞の実証的かつ詳細な分析を提示している。即ち、これら諸言語は、系列数（例えば日本語の「こ、そ、あ」を3系列と数える）はさまざまであるが、現場指示においては、遠称と近称の2系列があり、現場指示、非現場指示ともに、「談話に新規に導入する要素を指示する」「談話に導入済みの要素を指示する」「談話に導入済みの複数の要素の中から1つを選んで指示する」という3つの用法が存在することを示している。前2者の用法については、従来、これら諸言語のうち、一部の言語で部分的に指摘されていたにすぎなかった。また最後の「談話に導入済みの複数の要素の中から1つを選んで指示する」という用法は、従来全く知られていなかったものである。なお、本章で提示された5つの言語の全てのデータは、それぞれの言語の母語話者に直接インタビューを行なうことにより、自ら収集・確認したものであり、この点も高く評価される。

第3章では、チュルク諸語の指示詞と、英語や日本語など、言語系統の異なる言語の指示詞を対照し、チュルク諸語の指示詞が持つ談話に関わる機能が、これら言語には見られないものであることを示している。

本論文は、チュルク諸語に属する5つの言語の指示詞の機能と体系を明らかにした。特に談話に関わる機能について、明確な枠組みとともに、詳細かつ実証的な分析を提示した点で、広く言語学における指示詞研究に貢献するものであり、また、チュルク諸語研究においても、新たな地平を切り拓くものとして、高く評価される。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つと認める。